

田村志津枝さん コラム

# PICK UP MOVIE

## 『ヒューマン・ポジション』

[2022年/ノルウェー/ノルウェー語/ヴィスタ/78分]

監督・脚本・編集：アンダース・エンブレム

(C) Vesterhavet 2022

静かに深く  
考えつつ生きる

9/27~



ノルウェーの人口4万余りの町オースレン、ひと気のない白夜の景観が印象的だ。そこで暮らす新聞社勤めの女性アスタと、同じ家で暮らす移民の出自とおぼしき年代の女性ライブの物語だ。

この作品には説明的なセリフはなくBGMもない。さりげないが独特のアングルのショットが、彼女たちの住む世界を少しずつ語っていく。二人はどうやら、古い建物をリフォームしながら暮らしているようだ。

アスタは木立の間の野原や石垣のジグザグ道を下って出勤していく。同僚と交わす短い挨拶から、彼女が病休休暇明けの久しぶりの出社らしいと分かる。彼女は取材して記事を書く。小さい町らしくホッケーチーム、アールヌーボー建築の保存運動、というような身の周りの出来事だ。

家では同居人のライブが椅子の修理再生の仕事をし、電子オルガンを弾いて自作の歌をうたう。二人は食事を作り、ボードゲームをする。たまには柔道着や浴衣姿で、箸で食事を楽しんだりもする。

そんなある日アスタは、アスタンという名の難民のことを知る。彼は長くノルウェーに住んでいたのに、難民申請が却下されて強制送還されたという。アスタはもっと詳しい記事を書こうと、彼のかつての職場や関連の役所などを取材する。けれども真相はなかなかつかめない。アスタは、自分の立ち位置について考え込む。この問題に自分はどうアプローチすればよいのか、アスタのことを本当に理解できるのか。

アスタはライブにノルウェーをどう思うかと尋ねる。めったにない話題に驚いたライブは簡潔に自分の思いを語る。自分たちは不満を言える立場にはなく、この国への批判も許されない。そこそこ快適で自由だが、常にある種の不安定さに脅かされてもいる。それを聞いてアスタもまた心の内に抱える不安を反芻する。

そんな思いを抱えつつも、二人は穏やかな生活を続け、日々を楽しむ努力も怠らない。アスタが密かに手に入れたライブへのプレゼント、そしてそのお礼にライブが唄う自作の歌が、彼女らの深い思索と互いへの思いやりを静かに伝えてくれる。

この作品には、二人の暮らしぶり、静かな街並みなどのショットが繰り返してくる。気がついてみればそれらが、一筆一筆余白を埋めていく絵画のように、二人の生き方ばかりか心の内までじっくり描き出していることに驚かされる。シンプルなプロットの小品に豊かな物語を盛り込んでみせた監督の今後が楽しみだ。

プロフィール

### 田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からハウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。